

FREUDE の 歴史と提案



4代目団長 木村 義一(2008～2009)

【歴史】会報は'97年、庄司務さんの担当で「札幌メールクワイア通信」No.1が発行され、それを山本義行さんが引き継いで始まりました。しかし、'99年に、総意で誌名を「札メール通信」と改めて発行することになり、庄司務さんの担当でその第1号が発行されました(No.1～12)。やがて誌名は「札メール通信」「札メール通信 Freude」「札幌メールクワイア通信 FREUDE」と微妙に変化し、担当者も庄司務さんから家登正美(No.13～19)、木村義一(No.20～108、その間91～96は畑野哲也)、竹田誠(No.109～)の各氏に受け継がれて今の「FREUDE」になりました。(Noなど誤認あればご容赦下さい)

ところで、担当してみるとそれなりの苦勞があります。担当年数のトップは木村の8年(79誌)。群を抜いた苦勞度・・・と自慢しかけたら・・・何と、現在4年の竹田さんは91誌・・・年間発行数10対23では足元にも及びません。まさに彼はスーパーマン。それだけに彼の努力と苦勞が伺われます。

手元にある誌をめくっていると、さもなく書き綴った出来事から、あの日のメールが蘇ります。また、技術的にも表現力でも、確実に向上してきた足跡が伺えます。更に、多くの団員から寄せられた音楽以外の多彩な文章は、それぞれの個性が生き生きと蘇り、団員相互の交流、疎通に大きな役割を果たした、との思いを強くします。

【提案】今、竹田さんの努力で詳細な記録が残されていることは、今までにない素晴らしいことです。他方、誌の基本は「団員皆で作ること」だと考えますと、一般団員の投稿が少なすぎるのではないのでしょうか。その観点から今後の「FREUDE」について皆で考えてみてはどうでしょうか。単に音楽だけの集まりではもったいない、素晴らしいパーソナリティーの集団札幌メールクワイアです。せめて「FREUDE」では音楽の枠を超えて、多角的知的集団？を夢見てはいかがでしょうか。

オー・フロイデ！

5代目団長 石黒 直文 (2010~2011)



毎週日曜日、メールに通うのが楽しい。何が楽しいかっていうと、もちろん合唱団だから、歌うのが楽しいに決まっているが、私の楽しみはもう一つある。それは歌っている仲間の数を数えること。最近のメンバー数は、このクソ暑い日にもかかわらず、40人近い。みんな枯れて水気のない年齢のはずなのに、部屋が熱気と湿気でムンムンする。

私が、ひよんなはずみに団長を引き受けた2010年度、大変悲しいことがあった。それは、バスの佐藤守さん、テナーの西尾勝慶さんという素晴らしいメンバーを病で相次いで喪ったことだ。

お二人を送る歌声の中で、痛切に考えさせられた。この少子高齢化の時代、何もしないで成り行きに任せれば、メンバーは次第に減少し、消えてしまう。

2011年2月、団員増強計画をみなさんに諮った。1年後には実働団員数を40名にする。そして、創立40周年に当たる2015年度末には60名にする。

団員増強は、全員の仕事だが、特に増強委員として、竹内、小川(和)、竹田、高橋(保)、長井の5氏にお願いした。

最近の成果はめざましい。11年度末には第一次の目標ライン40名を突破した団員数は、50名に近づきつつある。

15年度の60名という目標は、ちょっとハッターリだったかなと思ったが、増強委員の皆さんは竹内委員長以下「楽勝」だと言ってくださる。

この成果は、もちろん、増強委員の献身と団員の皆様の努力のおかげだ。

しかし、今回は、フロイデ200号記念だ。そこで、フロイデという紙媒体とホームページというネット媒体を一身に引き受けていただいている竹田さんに、心からの感謝を申し上げたい。

この7月にフロイデが200号を突破した。

計算してみると3年ちょっとの間に約80号、月に2回以上のペース。

機関紙を確実に発行するというのが、どれほど大変なことか。

もう一つ、ホームページも大変な仕事だ。特にきちんとメンテすることは決して容易なことではない。

この二つが団の内外を結ぶ「きずな」だ。

今、新会員の半数は、これらの「きずな」を手繰って団の入口に着く。

この比率は、今後ますます増えるだろう。

竹田さん、今後ともよろしくお願いします。みんなで支えますから。

FREUDE200号記念特集号に寄せて

6代目団長 高橋保志 (2012～)



FREUDE 200号は7月19日、北光教会でのカルチャーナイト特集でした。200号の件は以前より気になっていましたが、最近発行間隔が短いこともあり、ついうっかりしてしまいました。

手元にあるFREUDEを捲りますと、100号(08.7.27)には「秋元さん、順調に回復」「練習計画」「愛全病院、鍼灸学校への出前演奏」など、150号(11.2.20)には「カール・ベームに魅せられた佐藤守君逝く」の追悼特集になっていますし、110号(09.6.21)頃からは現在のスタイルに、カラー写真も多くなり一段と華やかになってきました。

私も「ペニスと鉛筆(06.1.9)」「東京ローズとマラリア(07.2.4)」「薬石効なく(08.9.7)」「咽と喉(12.4)」「それでー?(12.10)」などの駄文を、赤面ながらも懐かしく読み返しているところです。

お陰さまで我が札メールもAKB48を超え、今や50名の大所帯にならんとしています。タイトな練習の繰り返しの中、お互いの顔と名前を覚えられないという声も聞きますが、編集子には連絡・報告のみでなく、FREUDEを通して「おぬし、中々やるな」とか「へえ～意外な面があるな」など、有効活用の方策をお願いしており、毎号の大変なご苦労には紙面を借りて御礼申し上げる次第です。

“名簿・規則・会報の三つが揃って、初めて組織として認められる”と聞いたことがあります。団員間の意思疎通(最近「絆」とも)を図り、活動記録としてもFREUDEの持つ意義は大きいと考えます。その意味において、不定期発行ゆえ200号はまさに札メールの長い歴史そのものです。

繋いで頂いた歴代の編集者ならびに原稿をお寄せ頂いた諸兄に感謝申し上げます。ありがとうございました。